LES BELLES IMAGES

par

Simone de Beauvoir

美しい映像

シモーヌ・ド・ボーヴォワール
朝吹三吉・朝吹登水子訳

LES BELLES IMAGES
par
Simone de Beauvoir

人文書院

Simone de Beauvoir: LES BELLES IMAGES
© Editions Gallimard, 1966
Published in Japan by arrangements
with Editions Gallimard through
Bureau des Copyrights Français

美しい映像
1967年12月10日初版発行
1969年4月30日重版発行
著者　シモーヌ・ド・ボーヴォワール
訳者　朝吹三吉　朝吹登水子
装幀者　真鍋　博
発行者　渡辺睦久
発行所　人文書院
京都市下京区仏光寺高倉西　TEL(351)3343, 3391

小林印刷所　　坂井製本所製本
定価480円

美しい映像

クロード・ランズマンに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

「今年の十月は……例外的ね」とジゼル・デュフレーヌが言う。みんな同感の意を表し、微笑する。夏のような暑さがグレイ・ブルーの空から降りそそぐ――ほかの人たちが持っていて、私に欠けているものは何なのかしら――彼らは『フランス美景』や『家と室内』など高級雑誌のグラビアに掲載された完璧な絵姿に見惚れている。すなわち、この別荘、パンひとかけらの値――まあ、上等のパンとしておこう――で買った農家を、キャビア何トン分かの大金をかけてジャン＝シャルルが手を入れ装飾をほどこしたこの別荘。（「金に糸目はつけないよ」とジルベールが言ったものだ）、石垣に咲くバラ、菊、紫苑、ダリア（「イル・ド・フランス中でいちばん美しいダリアよ」とドミニックが言う）。青と紫の肘掛け椅子と屏風――なんて大胆な色の取合せ！――が芝生の緑の上にくっきりと際立ち、グラスの中で氷が軽やかに鳴る。ウーダンがドミニックの手に接吻して挨拶する。ドミニックは黒のスラックスに派手な色のシャツ・ブラウスを着て、ひときわやせて見え、

ブロンドと白の淡い色調の髪、うしろ姿は三十歳にしか見えない。「ドミニック、あなたのようなすばらしいもてなしぶりは誰も真似ができませんね」。（この同じ瞬間に、どこか別の、まったくちがう、しかしまったく同様な庭で、誰かがこれと同じ言葉を言う、同じ微笑が別の顔に浮かぶ。「なんてすばらしい日曜日！」なぜ私はこんなことを考えるのかしら？）

すべては完璧だった。太陽と微風、バーベキュー、分厚いビフテキ、サラダ、果物、ぶどう酒類。ジルベールはケニヤでの狩りや旅行の話をし、それから日本のはめ絵あそびに没頭する。まだ六個組み入れなければならない。ローランスは渡し守テスト（クイズの一種）をすることを提案し、みんな夢中になって打ち興じた。彼らは自分自身について驚き、互いに他人（ひと）のことを笑うのが大好きなのだ。ローランスは一生懸命に努力したので、今はすっかり沈んだ気持になっている。私は循環気質なんだわ。ルイーズは庭の奥の方で従兄妹たちと遊んでいる。カトリーヌは軽い薪の火が燃えているストーブの前で本を読んでいる。それは、絨毯の上に寝ころんで本を読むあらゆる幸福な少女たちの姿だ。『ドン・キホーテ』。先週は『クェンティン・ダーワード』。とすれば、夜、彼女が泣くのはこのためではない。ではなぜだろう？　ルイーズはすっかり心配していた、ママ、カトリーヌは何か悲しいことがあるの、夜、泣くのよ、と。先生たちは彼女の気に入っていたし、新しい友だちもできた。健康はいいし、家庭も明るい。

「また、何かキャッチ・フレーズを考えていらっしゃるんですか？」とデュフレーヌが言う。

「私、部屋の壁を木材のパネル張りにするといいって、人びとに思いこませなければならないの」。

都合がよかった。彼女が人前で思いにふけるとき、人びとは彼女が何かキャッチ・フレーズを考え出そうとしていると思うのだ。彼女の周囲では人びとはジャンヌ・テクシエの自殺未遂事件について話している。左手にシガレットを持ち、そして、他人が彼女の言葉をさえぎるのを前もって制するためかのように右手をひろげて高くあげて、ドミニックがその響のいい、高圧的な声で言う、「あの女は元来それほど頭がいいわけじゃない。彼女を成功させたのは旦那さまよ。でも、それにしても、パリでいちばん注目の的の女性のひとりなんだから、お針子みたいな振舞いをすべきじゃないわ」。

どこか別の、まったくちがう、しふしまったく同様な庭で、誰かが言う、「ドミニック・ラングロワ、彼女を成功させたのはジルベール・モルチエよ」と。しかしそれは不当だ。ドミニックは一九四五年にたいした紹介もなしに放送局に入り、それからまったくの自力で現在の地位をかち得たのだ。馬車馬のように働き、邪魔になる存在を片っぱしから踏みつけながら。どうして人びとはお互いにやっつけ合うことにこんなにも喜びを見出すのだろうか？　人びとはまた言う、そしてジゼル・デュフレーヌもそう思っている、ママがジルベールを引っかけたのは欲得ずくからだと。なるほど、この家も、方々への旅行も、彼なしでは彼女には手に入れることができなかっただろう。し

かし彼が彼女にもたらしたものは別のものなのだ。彼女がパパのもとを去ったとき、彼女は何と言っても途方にくれていた（パパは家の中を幽霊のようにさまよっていた。マルトの結婚がすむとすぐ、ママはなんと冷酷な仕方で家を出て行ったことだろう）。彼女がこんなに自信のある女になることができたのはジルベールのおかげなのだ。（もちろん、考えようによれば……）。

ユベールとマルトが、大きな枝葉を両腕にかかえて森から帰ってくる。頭をうしろにそらし、口もとにはりついた微笑を浮かべて、マルトは快活な足取りで歩いてくる。神への歓ばしい愛に酔った聖女、これが信仰を得て以来彼女が演じ続けている役柄だ。ふたりは青と紫のクッションの上の彼らの席に再び腰をおろし、ユベールはパイプに火をつける。彼は、パイプのことを「ぼくの古なじみのきせる」なんてフランスでよぶ最後の男にちがいない。中風患者のような彼の微笑、ぽってり肥った身体。旅行をするとき、彼は黒めがねをかける、「ぼくはおしのびで旅行するのが好きでね」。余暇には綿密に競馬の予想を研究する、腕のよい歯科医。マルトが代償を作り出したのもわかるわ。

「ヨーロッパではもう、夏、どんな海岸へ行っても自分の体を横たえる場所さえ見つからないわね」とドミニックが言う、「バーミューダじゃ、はてしない砂浜がいっぱいあるわ。ほとんど人気がなく、誰も知ってる人に会わないで」。

「お金のかかる僻遠の地っていうわけね」とローランス。

「じゃ、タヒチは？　なぜタヒチへまたいらっしゃらないの？」とジゼルがきく。
「一九五五年にはタヒチはよかったわ。今ではサン・トロペよりひどいわ。低俗よ……」。
二十年のへだたり。パパがフィレンツェやグラナダへ行くことを提案すると、彼女は言ったものだった、「誰も彼もが行くじゃないの、低俗よ……」。四人そろって自動車に乗って、フヌイヤール一家って図ね、と彼女は言った。パパはひとりでイタリアやギリシアを旅行して歩き、私たちは流行の避暑地――とにかくママが当時流行の避暑地と考えていたところ――に逗留するのだった。今では、彼女は日光浴をするために大西洋を横断する。クリスマスには、お祝いの晩を過ごすためにジルベールが彼女をバルベック（レバノンにあり、ローマ時代の遺跡で有名）へ連れて行くことになっている……。
「ブラジルには、すばらしい海岸があるっていうじゃないの、人がいなくて」とジゼルが言う。
「それにブラジリアへも寄れるし。わたくし、ブラジリアはぜひ見たいと思うわ」。
「まあ、いやだ」とローランスが言う、「パリ郊外の団地だけでも、とてもゆううつじゃないの。都会全体があんなぐあいだったらどうでしょう！」
「お前は父親似の、過去礼賛家だね」とドミニック。
「そうじゃない人なんていますか？」とジャン＝シャルルが言う、「ロケットやオートメーションの時代なのに、みんな十九世紀と同じ精神状態でいますよ」。
「わたしはちがうわ」とドミニック。

「君は何においても例外的だよ」とジルベールが確信的な口調で言う（確信的というより、むしろ誇張した口調と言うべきだろう。彼はいつでも自分の言葉と自分自身のあいだに距離を置く人だ）。

「とにかく、ブラジリアを建てた労働者たちは私と同じ意見よ。自分たちの木造の家を出ようとはしなかったわ」。

「彼らには選択の余地があまりなかったんですよ、ローランス」とジルベール、「ブラジリア市内の家賃は彼らには手が届かない額ですからね」。

軽い微笑が彼の口もとを丸くする、自分の優越性をわびるかのように。

「ブラジリアは、今ではもう時代おくれなんです」とデュフレーヌが言う。「あれはまだ、屋根や、扉や、壁や、煖炉（ストーブ）などがそれぞれ別々に存在している建築です。現在、人びとが実験しようとしているのは、各部分が多価的な、合成的、一体的な建物なんです。屋根が壁とひとつになって中庭（パティオ）の真中に垂れ落ちる、というような」。

ローランスは自分に不満だ。彼女は明らかに馬鹿なことを言ったのだ。自分のよく知らないことについて喋るとこういう羽目になる。あなたが知らないことについては話してはいけません、とウーシェ嬢（せんせい）が言ったではないか。でも、それなら決して口を開く機会はないだろう。彼女は黙って、ジャン＝シャルルが未来の都市を叙述するのを聞いている。彼が生きているうちは決して見ること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

がないはずの、こうした未来の驚異的なことが、彼を夢中にする。どうしてだろう。現代の人間が中世の人間よりも幾センチか背が高いこと――そして中世の人間はすでに先史時代の人間より背が高かったのだが――を知ったとき、彼はひどく喜んだ。こんなに熱中することができるなんて、うらやましい人たちだ。またもや、そして相変らずの熱心さで、デュフレーヌとジャン＝シャルルは建築の危機について議論を始める。

「資金を見つけなければならない、それはたしかだ」とジャン＝シャルル、「しかし、ほかの方法でね。反対されて断念したら、歴史の外へ落ちこむことになるよ」。

誰も答えない。沈黙の中にマルトの霊感を受けたような声が高く響く、「もしすべての国の人たちがそろって軍備撤廃に賛成したら！　パウロ六世の最近のメッセージをお読みになりました？」

ドミニックが苛立たしげにマルトの話を中断する、「その道の権威すじがわたしに断言したんだけれど、たとえ戦争が起こったとしても、人類が現在の進歩段階に再び到達するには二十年あれば充分だそうよ」。

ジルベールが顔をあげる。彼はあと四片はめこめばいいのだ。「戦争はないさ。資本主義諸国と社会主義諸国とのあいだの距離は間もなく無に等しくなる。なぜなら現在では、そしてこれが二十世紀の偉大な革命なのだが、生産することは所有することより重要なのだ」。

それなら、なぜあんなに巨額の金を軍備に費やすのだろう？　とローランスは考える。しかし、

ジルベールはこれへの答を知っているにきまっている。彼女はもうこれ以上言いくるめられるのはいやだった。それに、ジャン＝シャルルが答えたではないか、原爆をもたなければ歴史の外へ脱落するだろう、と。歴史の外へ脱落するとは、正確にはどういう意味だろう？　それはきっとたいへんな破局なのだろう、みんなはひどく狼狽した様子をしていたから……。

ジルベールが慇懃な様子で彼女のほうを向く、「金曜日にぜひいらっしゃい。私の新しいステレオ装置をお聞かせしたい」。

「カリムやユーゴスラヴィアのアレクサンドルのと同じ装置なのよ」とドミニックが言う。

「実際すばらしい装置なんです」とジルベール。「一度それで聞くと、もう普通のステレオでは音楽を聞く気になれません」。

「じゃあ、私、それを聞きたくないわ」とローランスが言う、「私、音楽を聞くの大好きなんですもの」。（いや、それは事実ではない。私はただ気の利いたことを言いたいために、そう言ったんだわ）。

ジャン＝シャルルはひどく興味をいだいた様子である。「最小限度いくらぐらいかかるんですか、ハイファイのいい装置って？」

「最小限度、ほんとうの最小限度、三十万旧フランかければモノの装置ができる。しかしそれとこれとは、まったく比べものにならない」。

「じゃ、ほんとうにいい装置のためには、だいたい百万はかかるっていうわけですか？」とデュフレーヌがたずねる。

「まあ、聞きたまえ。モノのいい装置は六十万から百万かかる。ステレオだったら、二百万は必要だね。いいかげんなステレオよりはむしろモノを君にすすめるね。ちゃんとしたアンプだけで約五十万はかかる」。

「ぼくの言った通りですね、最小限度百万か」とデュフレーヌがため息をつきながら言う。

「百万フランをもっとくだらなく使う方法もあるからね」とジルベール。

「もしヴェルニュがルーション地方の仕事を獲得すれば、それを自宅（うち）に買おう」とジャン＝シャルルがローランスに言う。それからドミニックのほうを向き、「ルーション地方でいま建てつつある集団娯楽施設のひとつのためにヴェルニュは相当すごいアイディアをもっているんです」。

「ヴェルニュはたしかにすごいアイディアをもってますよ。ただ、あまり実現されませんがね」とデュフレーヌ。

「いや、今度は実現するよ。あなたは彼をご存じですか？」とジャン＝シャルルがジルベールにたずねる。「ヴェルニュと一緒に仕事をするのはすばらしいです。仕事場（アトリエ）全体が熱に浮かされます。実施するんじゃなくて、創造するんですからね」。

「ヴェルニュは彼の年代の最も偉大な建築家よ」とドミニックが言いきる。「都市計画の超アヴ

ァン＝ギャルドね」。
「ぼくはそれにしてもモノーの事務所にいるほうがいいな」とデュフレーヌ。「あそこじゃ創造しないで、実施する。だけど収入はずっと多いからな」。
ユベールがパイプを口からはなす、「それは考慮に値することだね。」
ローランスは立ちあがり、母親にほほえみかける、「ママのダリア、何本かいただいていい？」
「ええ、もちろん」。
マルトも立ちあがった。そして姉と一緒に出て行く。
「お姉さん、水曜日にパパに会った？　パパどう？」
「家ではいつもごきげんがいいわ。パパ、ジャン＝シャルルと議論したわ。たまにはちがったことがしたかったんでしょう」。
「ジャン＝シャルルもやっぱりパパを理解してないわ」そう言ってマルトは空に目をやる、「パパはほかの人たちとはまるでちがうわ。パパはパパ流に超自然の状態に達してるわ。音楽にしても、詩にしても、パパには祈りなんだわ」。
ローランスはダリアの花々の上に身をかがめる。マルトのこうした言い方が気づまりなのだ。もちろんパパはほかの人たちの持っていない何かを持っている。私に欠けているものを（それにしても、私も持ってない何を彼らは持っているのだろう？）。桃色、赤、黄、オレンジ色、すばらしい

ダリアの花々を彼女は手の中に握りしめる。
「いい一日だった、あなたたち？」とドミニックがたずねる。
「すばらしいわ」とマルトが熱意をこめて言う。
「すばらしいわ」とローランスがくり返す。陽がかたむく。彼女は自宅へ帰るのが決して悪い気持はしない。彼女はためらう。彼女は最後の瞬間まで延ばしていたのだった。母親に何かを頼むことは、十五歳の少女だったころと同じように彼女の心を臆させる。
「ママにお願いがあるんだけど……」。
「なに？」ドミニックの声は冷たい。
「セルジュのことなの。彼、大学をやめたいんですって。そして放送局かテレビの仕事をしたいらしいの」。
「お父さんから頼まれてきたの？」
「パパのところでベルナールとジョルジェットに会ったの」。
「あの二人、どうしてる？　相変らず、ピレモンとバウキスのように質素にむつまじく暮らしてるってわけ？」
「さあ、私、ほんのちょっと同席しただけなの」。
「お父さんにはっきり言ってちょうだい、何度もくり返したくないから。わたしは職業紹介所じ

やありませんって。こんなふうにわたしを利用しようとするなんて、少し言語道断ね。わたし、他人から何かを期待したことなんか一度だってありませんよ」。

「でも、パパが自分の甥を援けてやろうとしていることについて、パパを非難することはできないと思うわ」とマルトが言う。

「わたしはあの人が自分自身では何もできないことを非難しているのよ」。ドミニックは手ぶりで異議を制する。「もしあの人が神秘家なら、トラピスト修道院にでも入っているのなら、わたしもわかるわ（いやわかりなんかしない、とローランスは思う）。そうではなく、あの人は凡庸さを選んだのよ」。

彼女は彼が、彼女が結婚するとき彼がそうなると思った大弁護士にではなく、議会の議事録書記長になったことが許せないのだ。まあ車庫入りっていうところだね、と彼女は言う。

「もうおそいわ」とローランス、「私、二階へ行ってお化粧してくるわ」。

彼女の父親が攻撃されるのを我慢することはできなかった。父を弁護しようとすれば、もっと悪い結果になる。彼女は父のことを考えるたびに、心がチクチクと痛み、一種後悔に似た気持になるのだ。そう感じる理由はなかった、私、お母さんの味方をしたことは一度だってないのだから。

「わたしも着物を着かえに二階へ行きます」とドミニックが言う。

「わたしは子供たちの世話をしましょう」とマルト。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.